

「地域枠」の制度を超えて、 医師として輝くステップへ 一人ひとりの自律に寄り添う 群馬の「見守り」

医学部附属病院 地域医療研究・教育センター 准教授
群馬県地域医療支援センター 専任医師（小児科）

羽鳥 麗子 [はとり れいこ]



将来の地域医療を担う若手医師をどう育てるか。群馬県では行政と大学病院が密に連携し、制度を超えて自律に寄り添うサポートを実践している。小児科医であり、大学病院と県をつなぐ部門長として学生たちを見守る羽鳥麗子先生に、若手が不安を抱えることなく、安心して歩むための「見守り」の工夫を伺った。

— 先生は医学部附属病院と地域医療を結ぶ前線で活躍されています。

私が所属する医学部附属病院の「地域医療研究・教育センター」は、将来の群馬県の医療を担う人材育成とキャリア形成支援を行う組織です。私は二つの部門長を兼任しています。もう一つの「群馬県地域医療支援センター」は医師確保や地域枠支援を担う県の組織で、県庁(行政)と大学病院(現場)の双方に設置されています。県が施策・財政というハード、大学病院が実務・教育という受け皿(ソフト)を担い、表裏一体で密に連携して活動するワンチーム体制が群馬の強みです。

— 「地域枠制度」とは何ですか。

将来、群馬の地域医療に貢献したいという強い意志を持つ学生に修学資金を貸与する制度です。卒業後10年間、県内の特定病院(うち4年間以上は医師不足地域や医師不足の診療科)で診療従事することで、返還が免除されます。

現在は群馬大学に加え、県外の4つの私立大学(東京医科大、杏林大、帝京大、順天堂大)とも連携し、

全体で1学年計31人の地域枠定員を確保する広域なパイプラインを構築しています。これにより、地元を離れて他県で学ぶ学生たちも、在学中から群馬の医療者コミュニティとしっかりつながり、県内外の仲間から互いに刺激を受けながら戻ってこられる環境を整えています(図)。

❖ 必要なときにそっと手を差し伸べる ❖ 「見守り支援」

— 具体的には、どんなサポートをしているのですか。

学生が悩みを一人で抱え込み、不安を大きくしない環境づくりを最優先にしています。当センターの相談窓口は、県からの力強い後押しでこれまでの2名から一挙に4名体制へ強化されました。学年もキャリアも異なる素晴らしい医師たちが多角的に相談を受け止めます。面談も「体調はどう。部活も忙しい?」といった雑談から始まり、学生のペースで将来を対話する温かい「見守り役」を目指しています。

また、ライフイベントへの配慮として、育児短時間

勤務の期間も実際の勤務時間に応じて従事期間(10年間)に算入できる柔軟な運用を新たに決めました。例えば、週に平日3日の勤務であれば0.6年分として10年間の従事期間にカウントされるため、「義務があるから、結婚や子育てなどのライフイベントをすべて先延ばしにしなければならない」という心理的負担を劇的に減らすことができます。男女協働キャリア支援の視点からも、キャリアと人生の双方を安心してデザインできる仕組みは不可欠です。

— 埼玉医大との連携事業はどういうものですか。

埼玉医科大学との共同プログラム「利根川プログラム」では、県境地域の医療機関での実習やオンライン討論を実施しています。これは文部科学省の「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」として進めている先進的な取り組みで、大学や県境の壁を越え、お互いに刺激を受けながら多角的な視野で地域医療を学ぶ教育の枠組みとなっています。

❖ 連携のプラットフォーム ❖

— 「ぐんま総合診療医センター」の意義は何ですか。

群馬県は医師不足という課題を抱えており、第9次保健医療計画では、外科、小児科、産婦人科、救急科、脳神経外科、総合診療科の6つが「特に不足する診療科」とされています。

地域医療を支える地域枠の学生たちには、医師免許の取得を目指すだけでなく、群馬に「今、どのような医療が不足しているか」「将来、どのような医療が必要とされるか」をきちんと理解した上で、自律的に将来の診療科を選択してほしいと願っています。

もちろん、興味や憧れなどをきっかけとして様々な理由で選択すると思いますが、大切なのは『地域の未来のニーズを理解しながら選択する』という姿勢です。その象徴となるのが、患者さんを丸ごと診て地域の多職種とも連携する総合診療科です。

この総合診療医の育成を名実ともに機能させるには、これまでの枠組みを超えた有機的なつながりが必須

です。総合診療科の医師、県内の各総合診療に関わる医療機関、関係者や県などが一丸となった連携体制がどうしても必要になります。令和8年に新たに開設された『ぐんま総合診療医センター』という実体のあるプラットフォームが始動したこと。そこに、大きな価値があると考えています。

— 抱負を。

地域枠を「型にはまった制度」に終わらせず、若手医師が自らの意志で専門医資格を取得し、豊かなキャリアを築ける環境を整えること——それが私のミッションです。

指示を待つのではなく、自ら行動できる「自律した医師」を育てる。そして、若手や女性医師が「群馬なら人生もキャリアも諦めずに歩める」と確信し、従事期間が過ぎた後も自発的にこの地に根を張るような、人材育成の好循環を構築したいですね。

— 先生はなぜ小児科へ進んだのですか。

子どもの健やかな成長を長期間見守り、地域の未来そのものを支える仕事に強く惹かれたからです。私自身、プライベートでは三つ子を含む4人の男の子の母親でもあります。患者である子どもたちを温かく見守ること、若手医師の成長を支えること、そして我が子を育てることは、すべて「これからの未来を担う大切な世代を育む」という一つの想いでつながっています。すべての役割を大切に、次世代へバトンをつなぎたいですね。

